

教 育 長 様

代表者 校園名： 大阪市立新今宮小学校

公印

校園長名： 堀端 和彦

電話： 06-6631-2711 F A X： 06-6631-0486

申請者 校園名： 大阪市立新今宮小学校

職名・名前： 指導教諭・山田 文乃

電話： 06-6631-2711 F A X： 06-6631-0486

代表者校園 事務職員名： 秋田 正幸

平成 28 年度 「がんばる先生支援」個人・グループ研究 申請書

◇ 本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1 研究コース：

個人研究コース ・ グループ研究Aコース ・ グループ研究Bコース

継続研究： (2 年目 ・ 3 年目 ・ 4 年目)

2 研究テーマ

シームレスな中学校英語への移行をめざして
 ~小中一貫英語教育 『いまみやカリキュラム』の開発~

◆ 研究内容のキーワード：

小中一貫 小学校英語教育 家庭との連携 教材開発 文字指導 小中連携

3 研究目的：

- 中学校英語へのスムースな接続ができる小学校 1 年生からの英語教育を推進する。
- 保護者と連携した『おうちでも英語』スタディーを実践し、英語に触れる機会を多く持つことで、英語を身近に感じ、進んでコミュニケーションしようとする子どもを育てる。
- 「読む」「書く」活動を一体とした英語学習メソッド『いまみやカリキュラム』を作成する。
- 英語学習で身につけた力をアウトプットする機会として外国人との交流し、英語の必要性や英語を使ってつながることを楽しいと感じられる子どもを育てる。

4 研究内容：

○1 年生からの英語学習メソッド『いまみやカリキュラム』の作成

いまみや小中一貫校として、9 年間を一体として中学校の英語教育にシームレスに接続する学習課程を作っていく。発達段階に応じたカリキュラムを作成し、英語の文字と音の関連を学び「読む」「書く」活動に興味を持ち、英語をコミュニケーションのツールとして使える子どもを育成する。

○『おうちでも英語』スタディーの開発

英語モジュール学習で学んだ文字と音との関連をアウトプットする機会の一つとして、家庭で英語絵本の読み聞かせ等に取り組んでもらい、英語をより身近に感じられるような家庭学習プログラムを開発する。教材の発掘や開発、家庭への発信等を通して、英語への関わり方を伝え、自ら文字に興味を持ち、読もうとする子どもの育成を図るだけでなく、保護者の意識を高め、英語に触れる機会を家庭でも多く持てるよう啓発していく。

○英語の音と文字の関連を学び、生きた英語の音を追求する

フォニックス学習を子どもの実態に応じてより効果的なものになるよう学習を作り上げる。そのため、大阪市の進める「小学校からの英語教育」の音声教材等を活用し、英語モジュール学習の時間を 15 分ずつ週 3 回実施することで、耳から英語を学び、生きた英語を身につけた子どもを育成する。また、英語の授業では、校内で整備した DVD、CD、絵本、絵カードなどを使用し、視覚や聴覚から英語が自然に身につくようにする。小学校教員が苦手とする発音を補完し、正しい英語に触れる機会を多く持つために、C-net や中学校英語教員と TT 体制で英語を教える。英語モジュール学習の時間を進化させる中で、中学校でも活用できるようなフォニックス教材を開発する。

○英語指導のできる教員の育成

上記の英語モジュール学習も英語の授業も、共に小学校担任が T 1 となって進めていく。2020 年の教科化に備えて、小学校教員として英語を教える力は必要なものであり、英語指導のできる力量をもつ教員の育成は急務である。教員が効果的に英語指導法を学べるような英語研修メソッドを作り上げる。

5 活動計画 :

○『いまみやカリキュラム』に基づく英語学習

中学校教員と連携し、中学校のニーズと小学校の素地を養う学びを共存させるようなTT体制を作り上げる。

対象	実施時数	合計年間時数	実施時間
低学年	毎週20分	20時間	教育課程外の時間
中学年	毎週1時間	35時間	総合的な学習の時間
高学年	毎週1時間 + 総合5~10時間	40~45時間	週1回の外国語活動と、 総合的な学習の時間
特別支援	各学期1~2回	5時間	生活単元学習の一環として

○『おうちでも英語』スタディーの開発

5月に案内を出し、6月に英語絵本の読み聞かせ研修会を経て、絵本を配付する。人数にもよるが、月1回のペースで年間6回以上実施するまた、英語の必要性について保護者に発信する機会を持つ。毎回『reading diary』をつけてもらい、子どもと保護者の変化や成長のプロセスをつかめるようにし、段階に応じたアドバイスを行う。

○英語モジュール学習として行う文字付き音声指導の実践

大阪市「小学校からの英語教育」事業の指導案をベースに、より効果的なプログラムを創生する。週3回15分間、教育課程外の学習活動として行う。2~6年生は4月19日の週から、1年生は5月の第2週から3月まで実施。年間指導時数は、15分×週3回×35週=35時間。

○英語指導のできる教員の育成

- ・1学期から2学期の間に、英語科の研究授業を各学年・特別支援で年間7回、実施する
- ・他府県や他校の英語教育の情報収集、授業参観、英語教育に関わる各種研修会に参加する
- ・授業研究会に講師を招きし、指導講評と共に、英語指導についての研修会を持つ
- ・協力研究者との連携

奈良教育大学のPeter Ferguson先生と広島大学のAaron. C. Sponseller先生に年間を通じて連携し、知見を活かして『いまみやカリキュラム』作成や『おうちでも英語』スタディーをともに開発していく。

6 見込まれる成果 :

子どもから見た効果として、英語を身近に感じ、「読む」「書く」を含めた英語を使った活動に取り組むことで、コミュニケーション能力の育成が図られるとともに、つながる楽しさを知ることができる。また、言語のみならず、グローバルな視点の萌芽が期待できる。次に、教員から見た効果としては、英語の実践的指導力の向上は当然のこと、2020年から本格実施になる新学習指導要領にそった中学年の外国語活動・高学年の英語教育に円滑に移行できる。また、小中一貫の教育課程の創造が可能となるばかりか、中学校教員と連携して授業を進めることで、互いの違いを知り、小中連携の強化を図ることができる。また、それ以外の効果として全市に一貫校の利点をアピールするとともに、いまみや小中一貫校への支持を高める効果が期待できる。

7 成果の検証方法 :

○1年生からの英語学習計画：上記の英語の時数の実践を行う。低学年55時間、中学年70時間、高学年75時間以上、全学年で400時間以上の授業を実施する。

○英語学習に関する児童アンケート調査を実施し7割以上の児童が肯定的な返答をするように努める。

○保護者向けの英語読み聞かせ研修会を年間6回以上開催する。

○英語指導のできる教員の育成 :

- ・英語研修会を前期に2回以上実施する
- ・英語教育に関わる各種研修会に各教員が1回以上参加する
- ・英語科の研究授業を各学年1回以上 計6回以上実施する

8 研究発表の日程・場所(予定)

日程： 平成 28年 11月 25日～27日 JALT2016 場所：WINK AICHI ウインクあいち

9 代表校園長のコメント

施設一体型小中一貫校の特色の一つとして、コミュニケーションツールとしての英語を身につけさせる。その前に教員がその力量を持つことが必須であり、その育成は急務である。本校はその条件に非常に近いところにあると考える。本研究で弾みをつけたい。

上記の内容を原則としてA4判2ページで作成し、平成28年4月22日までに大阪市教育センター「がんばる支援」担当まで提出してください。

教 育 長 様

代表者 校園名： 大阪市立新今宮小学校

公印

校園長名： 堀端 和彦

電話： 06-6631-2711 F A X： 06-6631-0486

申請者 校園名： 大阪市立新今宮小学校

職名・名前： 指導教諭・山田 文乃

電話： 06-6631-2711 F A X： 06-6631-0486

代表者校園 事務職員名： 秋田 正幸

平成 28 年度 「がんばる先生支援」個人・グループ研究 報告書

◇ 平成 28 年度 「がんばる先生支援」個人・グループ研究について、次のとおり報告します。

1 研究コース：

個人研究コース・グループ研究Aコース・グループ研究Bコース

継続研究：

(2 年目 · 3 年目 · 4 年目)

2 研究テーマ

シームレスな中学校英語への移行をめざして

～小中一貫英語教育 『いまみやカリキュラム』の開発～

◆ 研究内容のキーワード：

小中一貫 小学校英語教育 家庭との連携 教材開発 文字指導 小中連携

3 研究目的：

○中学校英語へのスムースな接続ができる小学校 1 年生からの英語教育を推進する。

○保護者と連携した『おうちでも英語』スタディーを実践し、英語に触れる機会を多く持つことで、英語を身近に感じ、進んでコミュニケーションしようとする子どもを育てる。

○「読む」「書く」活動を一体とした英語学習メソッド『いまみやカリキュラム』を作成する。

○英語学習で身につけた力をアウトプットする機会として外国人との交流し、英語の必要性や英語を使ってつながることを楽しいと感じられる子どもを育てる。

4 取り組んだ研究内容：

○1 年生からの英語学習メソッド『いまみやカリキュラム』の作成

いまみや小中一貫校として、9 年間を一体として中学校の英語教育にシームレスに接続する学習課程を作成した。発達段階に応じた系統的なカリキュラムを作成し、英語の文字と音の関連を学び「読む」「書く」活動に興味を持ち、英語をコミュニケーションのツールとして使える子どもを育成した。

○英語の音と文字の関連を学び、生きた英語の音を追求する

フォニックス学習を子どもの実態に応じてより効果的なものになるよう学習を作り上げた。そのため、大阪市の進める「小学校からの英語教育」の音声教材等を活用し、英語モジュール学習の時間を 15 分ずつ週 3 回実施することで、耳から英語を学び、生きた英語を身につけた子どもを育成した。また、英語の授業では、校内で整備した DVD、CD、絵本、絵カードなどを使用し、視覚や聴覚から英語が自然に身につくようにした。小学校教員が苦手とする発音を補完し、正しい英語に触れる機会を多く持つために、C-net や中学校英語教員と TT 体制で英語を教えた。

○『おうちでも英語』スタディーの開発

英語モジュール学習で学んだ文字と音との関連をアウトプットする機会の一つとして、家庭で英語絵本の読み聞かせ等に取り組んでもらい、英語をより身近に感じられるような家庭学習プログラムを開発した。教材の発掘や開発、家庭への発信等を通して、英語への関わり方を伝え、自ら文字に興味を持ち、読もうとする子どもの育成を図るだけでなく、保護者の意識を高め、英語に触れる機会を家庭でも多く持てるよう啓発した。

○英語指導のできる教員の育成

上記の英語モジュール学習も英語の授業も、共に小学校担任が T1 となって進めた。2020 年の教科化に備えて、小学校教員として英語を教える力は必要なものであり、英語指導のできる力量をもつ教員の育成は急務である。教員が効果的に英語指導法を学べるような英語研修メソッドを作り上げることができた。

5 成果・課題 :

どの学年も、基本週3回のモジュール学習と週1回の英語学習を行った。また、年間9回、講師を招聘した授業研究会を行い、授業後の討議で指導講評をいただいた後、研修会を実施した。文部科学省や大阪市の英語教育の動向や、英語指導に対する考え方を学ぶことができた。また、校内研修会は年間4回、ワークショップ形式のものを中心に行い、日頃の活動を客観的に見直し、理論的に整理し直す機会とした。このような積み重ねの中で、小学校英語に関する指導方法、教材開発の研究や、学習指導要領の改訂等についての理解を深め、指導者一人一人の資質向上を図ることができた。

成果1 :「読む」「書く」英語指導のあり方が見えた

○「読む」「書く」活動を入れた1時間ごとの指導案と学年ごとのカリキュラム作成

「読む」「書く」実践を積み重ねながら、系統的なスパイラル学習「いまみやカリキュラム」を作成した。また、校内研修やワークショップを通して、発達段階に応じ、本校の実態に即した、目標と具体的活動内容を一覧表としてまとめることもできた。

○音・文字・意味を結びつける指導法の工夫

デジタル教材を活用して、良質な音源を繰り返し聞く活動をどの授業でも、計画の中に位置づけることができた。より定着を図るため、ICT機器を活用した視覚支援も行い、TPRの活動を多く取り入れた。

○文字を意識させる指導を指導者が意識する

文字を意識させることを指導者自身が意識し続けることで、活動の細部にもこだわる変化が見られた。普段の活動においても、一文字一音ルールで文字を読むよう促すなど、指導者側の意識の変化が指導の変化につながり、そのまま子どもの変化に直結したように見えた。

○週3回のモジュール学習を個別にアレンジする

夏の校内研修会では、英語モジュール学習で使っていたDVDの内容や指導法を見直すワークショップを実施した。子どもの実態に応じて、良質な音声をインプットし、文字意識を持たせる工夫を随所にちりばめられるのであれば、決まった型にはまる必要はない。アレンジ力を持つ機会になった。

成果2 :「おうちでも英語」スタディーの実施

家庭で英語に慣れ親しむ機会を持つために絵本を購入し、3週間ごとに研修会を行った上で希望する家庭に貸し出した。保護者も研修会で英語を学ぶ機会を楽しみにし、学んだことで無理なく家庭で読み聞かせを行うこともできた。絵を楽しみ、絵本を通した親子の会話を楽しみ、絵本で親子の時間を持つことができた。

○成績3 :指導者の実践力の向上

○オリジナル教材の開発

単元の目標や子どもの実態に合わせて、教材を開発することが増えた。学習材になり得るものは有効活用し、子どもにとって何が一番よいのかを考え、子ども目線の授業を組み立てることができた。

○ICT機器の活用

C-netによる発音練習の動画、導入で課題意識をつかむことができる自作動画などはもちろんのこと、発音練習のため作成された絵カード、レビューで身の回りにあるものの色を思い出し答えるためのスライドなど、電子黒板を活用した授業も多く見られた。もちろん、良質な音源を繰り返し聞くためのDVD音源や、Hi, friends! plusのジングルなどデジタル教材を含めると、どの授業でも一度はICT機器を使ったと言える。このICT機器の活用により、子どもの興味関心を引きだし、英語を学ぶ意欲を高めながら、自ら気づいて定着・理解できるきっかけを作ることができた。

○短時間で効果的な指導法の追求～英語と日本語の使い分け～

導入の場面でめあてを日本語で確認したり、アクティビティのゲームの説明に簡単な英語とパワーポイントを使ったりして、説明をなるべく短時間で行う工夫もみられた。なるべくわかりやすい英語表現でオールイングリッシュの授業をめざしながらも、ジェスチャーや指さしを取り入れ、英語のまま理解できるような工夫はしながらも、必要な場面では日本語を使用する、使い分けがうまくできるようになってきた。

○積極的に英語を話そうとする子どもを育成するための「場の工夫」

児童が英語表現を繰り返し発音できるように、活動をテンポよく変えていき、飽きずに楽しみながら習熟できる工夫は、どの授業でも見られるようになった。また、同じ活動でも、全体、グループ、ペア、個人と人数に変化を持たせ、同じ表現を何度も反復することで、定着を図ることもできた。

6 研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。

日程 平成28年11月26日 JALT

場所 : WINK AICHI 愛知県産業労働センター

参加者数 : 約20名

上記の内容を原則としてA4判2ページで作成し、平成29年2月24日までに大阪市教育センター「がんばる支援」担当まで提出してください。(研究資料等を添付)